

こもれば学級(情緒学級)の研究

帯広小学校の目指す子ども像

「自分が好き 友達が好き 学校が好き 帯広の街が好きな帯小っ子」

- (1) 対話を通して互いの考えの違いやよさに気づき、自他の思いを大切にできる子ども
- (2) 集団の中で、自分のよさを生かしながら、友達と信頼・協力できる子ども



研究主題

「自己を見つめ、互いを認め合いかわりあう子どもの育成」

～互いのよさや違いを認め合う人間関係づくり～

< 3年次計画の3年目 >

これを受けて、こもれば学級では、以下のような子どもの育成を目指す。

- (1) 自分のことを知り、自分の価値を認め、自分のことを大切にできる子ども
- (2) 他者を認め、相手の気持ちになって感じたり考えたりできる子ども
- (3) 自分の周りの人たちと、誠実に関わり、お互いに成長し合おうとする子ども

1 こもれば学級の研究について

(1) 本校の研究との関連（道徳的実践力との接点）

現在、発達に障がいのある児童生徒の特別支援教育が制度的には完全実施され、インクルーシブ教育が浸透し進んでいる。インクルーシブ教育の中では、障がいや社会的不利を有する子どもだけでなく、共に育つ周囲の子どもたちも影響を受けながら育っていく。どんな人たちとも協力し合って社会を作っていこうとする心を育てていくことが、より一層大切だと思われる。

本校の研究主題「自己を見つめ、互いを認め合いかわりあう子どもの育成」には障がいがあるないにかかわらず、「一人一人の違いを受け入れ尊重することの大切さ」を理解し、その心を育てていきたいという願いが込められている。

この研究主題をうけて、こもれば学級では、適切な自己認知を促し自己肯定感や自己統制力を高めながら、集団参加・対人関係のための様々な学習から社会性を育て、子どもたちが互いに成長し合える基盤を作っていきたいと考える。

こもれば学級には、発達障がいがある児童や特別な支援を要する児童が在籍している。「基本的な生活習慣が身に付いていない」「相手のことを考えずに自分の主張をしてしまう」「規律を守れず不適切な行動をとってしまう」「友達との関係がうまく作れない」などの課題をかかえる児童が多い。また、適切な自己認知ができていないため自己肯定感が低くマイナス思考になりやすかったり、感情のコントロールや気持ちの切り替えが苦手だったり、自己統制力の低さが目立つ児童もいる。これら

の児童は、障がいの程度や育ってきた環境などにより、社会性の獲得に何らかの困難を抱えており、集団生活の中で自然に社会的スキルを獲得することができないことが多いため、その改善のためには必要な社会的スキルを積極的に学習する必要がある。このように年齢に応じた社会性を身に付ける必要性が高まっていることから、こもれば学級では、小集団活動や個別の指導場面においてソーシャルスキル獲得のための支援のあり方や方法を研究し実践している。

以上のような児童の実態を受けて、大きな課題である「コミュニケーション能力」と「自己統制（セルフコントロール）力」の向上のための支援を行っていきたいと考えている。

* 自立活動で学習する内容と道徳的实践力とのかかわり

① コミュニケーションの基本である「あいさつ」に関すること

（あいさつの言葉、表情、態度、場面や人に応じたあいさつ、など）

【道徳の内容項目 B 人との関わりに関すること（礼儀）に関連】

② 「自己認知」に関すること

（自分の体や生活を振り返る、自分の体のケアの仕方、自己紹介の仕方、自分の好きなこと、自分のよさをみつける、自分のことを伝える、など）

【道徳の内容項目 A 自分自身に関すること（節度・節制）（個性の伸長）に関連】

③ 「相互理解のための言葉・表現」に関すること

（ふわつと言葉とチクツと言葉、アサーティブな表現、自分の気持ちを伝える言い方、気持ちよい言葉遣い）

【道徳内容項目 B 人との関わりに関すること（親切・思いやり）（友情・信頼）（礼儀）に関連】

④ 「相互理解のための気持ち認知」に関すること

（いろいろな気持ち、表情に表れる気持ち、隠れている気持ち、気持ちと行動、前向きな気持ち、など）

【道徳内容項目 A 自分自身に関すること（正直・誠実）に関連】

【道徳内容項目 B 人との関わりに関すること（親切・思いやり）に関連】

⑤ 「セルフコントロール／セルフマネジメント」に関すること

（ルールを守る・我慢する必要性、怒りを抑える方法、感情に対する対処方法、チャレンジすることの大切さ、自分を客観的に把握する、自己受容、など）

【道徳内容項目 A 自分自身に関すること（善悪の判断、自律、自由と責任）（正直・誠実）に関連】

⑥ 「相手を大切にしたいコミュニケーション」に関すること

（伝え方、聞き方、助けの求め方、協力の仕方、質問の仕方、提案の仕方、頼み方断り方、褒め方、配慮の仕方、共感すること など）

【道徳内容項目 B 人との関わりに関すること（親切・思いやり）（友情・信頼）（礼儀）に関連】

(2) 本校の特別支援学級（こもれび学級）の児童の実態から

情緒学級は主に情緒面に課題がある児童（自閉症スペクトラムなど）が中心となっているが、実態は多岐にわたっている。また、発達検査をまだ受けておらず客観的な情報が不足している児童もいる。

今年度の情緒学級は、1年生3名・2年生5名・3年生4名・4年生2名・6年生4名の18名が在籍しており、「人とのかかわりが苦手」「こだわりが強い」「注意が散漫で集中ができない」「自分の気持ちをうまく表現できない」「学年相応の学力が乏しい」など、実態の異なる様々な児童がいる。個別の指導計画をもとに、児童それぞれの課題に取り組んでいる。

(3) こもれび学級の指導形態

児童の実態やニーズに合わせて「個別学習」「小集団活動」「学級での支援」の学習形態をとっている。

「個別学習」では、教科の補充や実態に合わせ個々の学力を伸ばすこと、感情のコントロール、課題への挑戦、感情の発散などを行っている。

「小集団活動」では、個別の目標を意識しつつ、4～7人の集団の中で、場面設定をしてロールプレイを行ったり、ゲーム・制作などの活動を行ったりして、自己理解や他者理解する力を高めたり、自分を表現したり相手とやりとりをしたりして、コミュニケーション能力を高めたりすることを目標に活動している。

「学級支援」では、学級での学習の支援を基本として、個々の課題に対する配慮や支援を行っている。

2 研究仮説と仮説検証の視点

研究仮説

仮説1〈的確な子ども理解と支援の工夫〉

児童一人一人の実態や困り感を把握するとともに、個に応じた支援を行い適切な自己認知を促すことで、児童の自己肯定感や自己統制力が高まるであろう。

仮説2〈自己認知力・他者理解力、コミュニケーション力〉

小集団活動において、集団参加・対人関係など社会性を高める指導を行うことで、自己認知力や他者理解力、コミュニケーション力が高まり、自他の思いを大切にし、信頼・協力し合える子どもが育つであろう。

仮説検証の視点

視点1

児童一人一人の的確な実態把握に基づいた個別指導計画を作成し、個別の目標は自立活動の区分・項目との関連を明確にしているか。

視点2

題材は、「自分を見つめ、互いを認め関わり合う」方法として適切だったか。また、児童の発達段階に応じた、指導法の工夫や適切な支援がなされているか。

視点3

特別支援教育の視点に立ち、実際の生活に生かせることができ、将来の自立につながる学習内容であったか。

3 研究内容

1年次は、高学年では、主に自分を見つめ自分を知る自己認知に関する活動に取り組んできた。自分のことを大切にしていってよりよく生きるため、また相手と対等な関係を保つためには、自分のことを正しく理解している必要がある。自分の性格や長所・短所・願望・嫌悪などについて客観的に見ることができ、自己認識を深めることができた。また、ゲームやロールプレイを通して、相手の気持ちになって感じたり考えたりすることを体験し、相手に共感しながら他者理解を深める学習もしてきた。また、スピーチやミニトークなどの活動を取り入れ自分の考えを上手に相手に伝えるトレーニングや自分の感情のコントロールの仕方や対処方法について知らせ、考えを深める活動も行ってきた。

低学年では、発達段階を考慮し、実際に体を動かしたり制作・音楽的な活動を行ったり、人形劇でイメージをもたせたりしながら、集団に参加する上での基本となる「ルールを守ることの必要性」や「場面にあった言葉の使い方」などについて、学習を積み重ねてきた。

2年次は、高学年では、コミュニケーション力を高めるため、相互理解のための言葉・表現やセルフコントロールについて学習を進めてきた。円滑なコミュニケーションを行うためには、言葉の選び方や相手の感情を害さずに自分の思いを伝える表現を身に付けさせることが大切である。また、自分の気持ちを正しく捉え、上手に自分の気持ちをコントロールする方法について学習してきた。学習内容を理解し、相手を意識した言葉かけやロールプレイをすることができたが、日頃の実生活に生かすことは難しいこともあるので、このような学習を継続していくことが大切である。

低学年では、発達段階や個別の課題に特に配慮しつつ、1年次と同様、集団の中で求められている適切な言動（挨拶・返事・役割を果たすことなど）やルールの理解、話の聞き方や伝え方・我慢の仕方などについて、スモールステップで具体的に指導をしてきた。

また、小集団活動の中で、対人関係力の向上や身体的発達・知的発達の促進、心理的な安定など様々な効果が期待される「遊び」を取り入れ、社会性を育てていくような学習を行った。

特に低学年は話の聞き方や伝え方、「遊び」を通した約束やルールの守り方、友達との交流の仕方について日常生活の基礎となる力を大切に指導してきた。学習の際は、学習内容やめあてを理解し、意欲的に学ぶ姿が見られたが、高学年同様日常の生活で実践できるよう継続して何度も指導していくことが大切である。

今年度は3年次計画の3年目ということで、これまでの研修を積み重ねていき、1・2年目に実践してきた視点での取組を更に深化させ、より確実な子どもの見取り（実態把握と目標の設定）をして確かな評価につなげていく。実際に指導を進めていくにあたっては、道徳や自立活動の項目を参考にしながらも、子どもの実態に即して指導内容や方法を検討していく。

高学年は児童の実態を考慮すると共に、6年生として身に付けさせたい自己理解やコミュニケーション力を高めていきたいと考える。6年生は最高学年として学校の中心となり児童会活動やたてわり活動などで下級生をリードしていかなければならない場面が多い。また、1年生と関わる場面や修学旅行など自分の役割に責任をもつことや場に合った行動、相手を考えたコミュニケーション力が求められる。よって、児童の実態や1年間の学習内容、学校・学級行事など1年間の見通しをもった指導を計画し実践していくことを大切にしたい。

低学年は昨年度の反省から、話の聞き方や伝え方、友達との関わり方、また児童の実態から我慢の仕方や怒りの抑え方など自己統制力などの学習を進めていきたいと考える。

それぞれ個別指導では個の課題解決、小集団活動では自己理解や他者理解などスモールステップを大切にしていっていき、交流学級で自己表現しながら互いに学び合う力を育てていきたい。

4 こもれび学級での支援の構図

